

第二十一回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

森 一郎 著『死と誕生 ハイデガー・九鬼周造・アーレント』

(2008年1月30日 東京大学出版会 刊)

森 一郎 もり いちろう 昭和37年(1962)生まれ。埼玉県出身。

専攻は、哲学・哲学史(とくにニーチェ、ハイデガー、アーレントを中心とした西洋近現代哲学研究)。東京大学文学部(哲学専修課程)卒業。東京大学大学院人文科学研究科(哲学専攻)博士課程中途退学。東京大学文学部助手、東京女子大学文理学部(哲学科)専任講師、同助教授を経て、現在は東京女子大学文理学部教授。博士(文学)。

著作は、受賞作以外の近年の主な業績としては、訳書に『ハイデッガー全集第79巻 ブレーメン講演とフライブルク講演』、共著に『ハイデッガーと思索の将来—哲学への〈寄与〉—』、『講座 近・現代ドイツ哲学Ⅲ ハイデッガーと現代ドイツ哲学』、他がある。

受賞のことは

くじ運の悪い私は、子供のときから賭け事というものを避けてきた。パチンコも競馬もやったことがない。賞と名の付くものも、宝くじみたいなものと思い、なるべく考えないように努めてきた。小学生のとき習字や図工で表彰されたことはあったが、それ以後、賞にはずっと縁遠かった。生来口が悪いうえ筆を滑らせては角が立つこともしばしばで、人を傷つける言論にむやみと敏感な時代には、賞よりも罰のほうがはるかに近いと自分では思っている。そんな不埒な輩に、近代日本最高の哲学者の名を冠した権威ある文化賞が転がり込むというのは、寝耳に水というか、とてもありそうにないことだ。拙著のなかで私は、九鬼とアーレントの思考から「ありそうにないことが、それでも起こると信じてよい」という信念を引き出した。信心深いとは口が避けても言えない私だが、この信念はやはり間違っていなかったのだと思う。自分のくじ運はこれで完全に尽きたと半ば怪しみながら。

《選考委員評》

関根 清三

今年度の受賞者・森一郎氏は、わが国のM・ハイデガー研究を牽引して来られ昨年病床で大部のハイデガー研究を物されて逝かれた故・渡邊二郎先生の高弟であり、つとにハイデガー関係の精細な論考や厳密な訳注で知られ、単著の出版が俟たれていた方である。そして師の逝去の直前に間に合って、この処女作『死と誕生』を上梓された。処女作にして、既に手練の意匠の凝らされた優れたお仕事で、師ゆずりの広汎な学識と才気溢れる読解、絢爛たる思索に、満を持した意味があったと感佩したのは、決して私だけではないだろう。氏は本書において、ハイデガー研究を踏まえつつもそこに閉じることなく、彼の死をめぐる考察との批判的な対論を基盤にして、その二人の弟子、九鬼周造とH・アーレントの、偶然論や誕生の哲学に示唆を得た思索へと展開する。そして従来生の終わりとしての死に比して等閑に付されがちであった、始まりとしての誕生についての考察を、哲学的に補完し体系的に深化しようと試みたのである。

序説「始まりへの存在」は、出生の偶然と不平等にまつわる『ミリンダ王の問い』と『ヨハネによる福音書』、それらにまつわる九鬼とアーレントの問題意識を確認しつつ、「生まれ出づる悩み」を克服しようとして、新生としての「第二の誕生」が求められる所以を明らかにする。

第一部「被投性・偶然性・出生性」は、ハイデガー、九鬼、アーレントそれぞれの根本概念とその連関を論ずる。まず第一章「偶然のいたづら」は、若き日のハイデガーと、その初志を受け継いだと思われる九鬼、両者によるアリストテレスの偶然論解釈を取り上げ、アウトマトン(自動)とテューケー(運)を積極的偶然として詳細に読み解く。その結果、被投性の掘り下げとしての偶然性の主題が、歴史的生起の動性への問いとして確認される。第二章「生起・出会い・始まり」は、現実的なものの根底に「無限にありそうもなかったこと」がひそんでいる

ことを浮き彫りにする。第二章前半部は、ハイデガーにおいて既に、出生と偶然をめぐる問いが萌していたことを確認する。しかし展開深化されずに終わったこの問題を、アーレントと九鬼がそれぞれ独自に引き継いだ経緯が明らかにされる。それを受けて、後半部では、相まみえることのなかったアーレントと九鬼の思索が、「出生の偶然」という共通テーマにおいて、落ち合うことを示そうとする。両者のそのような結び合わせから、何気ない現実性のうちにひそむ偶然性と奇蹟性が、ひいては〈いのち〉の孕む「おのずから」の自動性が、生まれ出づる者どものたまさかの出会いから生ずる、始まりの出来事性に即して、解き明かされてゆく。

第二部「死と誕生」は、ハイデガーとアーレントとともに「終わり始まり」の思考を展開して、本書の中心部を形成する。第一章「死すべき者ども」は、死の実存論的概念が、戦争やテロルといった政治哲学的な問題次元へと通じていることを明らかにする。特にホッブズの自然状態論と交差させて、テロリズムを生んだ近代精神の系譜の一端を明らかにする。第二章「生まれ出づる者ども」は、前半部で「アーレントと誕生の問題」を扱い、彼女の「誕生の哲学」の出発点であるアウグスティヌス解釈に光を当てる。始まりには第一の始まりとあらたな始まりという両義性が具わること、終わり始まりは先駆と遡行という二重の志向において共属すること、始まりへの存在とは「始まりの記憶をもつ存在」であること、が示されてゆく。そして本書全体を締めくくる後半部は、「始まりとしての約束」をめぐる展開される。ギリシア悲劇『ヒッポリュトス』との対比において、『旧約聖書』のアブラハムによるイサク奉獻物語を取り上げ、約束という行為がその複数性ゆえに孕む不如意性を暗示するものであるという読解を呈示する。そして約束と赦しにおいて輝き現われる、相互拘束と相互解放の共同実存的自由が、第二の誕生への存在としての人間に可能となることが展望されて、本書は閉じられるのである。

このように、独創的な着眼点を多々有する本書は、その着眼を、広汎な文献を渉猟し多彩な思索によって展開しているが、著者の構想では、『世界への愛』という続編の序説という位置づけとなる。幽明境を異にする師、そして少なからぬ読者と共に、続編の出版も鶴首して待ちたいと想う。この受賞が、更なるお仕事への少しでも弾みとなればと、祈念しつつ。

黒住 真

現在、二十一世紀において、人間の死生をも含む生活は、どのように成り立ち、成り立つべきなのだろうか。この基本的なまたそれ自体とても大事な問いが、地域・国家を超えてグローバルな形で、人々に訪れ続けている。これに対して、森一郎氏は、二十世紀の東西を中心に、日本人・九鬼周造、ドイツ人・ハイデガー、ユダヤ人・ハンナ・アーレント、さらにまた哲学者や宗教者たち、その世界また歴史をも振り返りながら、あるとても重要な答えを、私たちに与えてくれている。

森氏のお仕事は、対象を幅広くとらえながらも哲学的でありまた論理的である。仏典における人間がなぜ宿業をもちいかに偶然であり複数なのかという問い、それはまた福音書における人間がなぜいのちを吹き込まれ新生・出生し復活するのかという問いに結び付く。この普遍的な関心が、上記の三者によって考察されているとし、さらに様々な思想家や作品に深く踏み込みながら、その内容が描かれていく。

偶然と出生をめぐる問題が、ハイデガーによる『存在と時間』(一九二七)とその後の歴史省察において捉えられている。この影響を受けながら九鬼周造が、その思索をライフワーク『偶然性の問題』(一九三五)に結集させていく。またアーレントは、間接的であるにもかかわらずこの問いを深くとらえ、これを『アウグスティヌスにおける愛の概念』(一九二八)とその改訂版また『人間の条件』や晩年の『精神の生』に表現する。森氏は、彼らが、死からさらに誕生を見出す構造を、具体的に把握するのみならず、またニーチェや『創世記』のアブラハムにも遡りながら総括し、そこに「約束と赦しの活動」がある、という。

本書の最後は、「偶然が、偶然にみちた連帯が現に成り立つことは、……相異なる系列を生きているわれわれの共同実存が、ともに自由でありうることを物語っている」と結ばれる。これは読者に大きな感動を呼ぶ。私自身は、そこに、哲学だけでなく倫理学としては、恩寵また罪責があり、これを乗り越える自己関係や他者があること、また存在論として、機械論よりもより有機体論があることを思い起こす。それらが一体どうなのかは、森氏のお仕事をもっと読み込み、今後さらにまた学べればと願っている。